

ЛЕВ НИКОЛАЕВИЧ  
ТОЛСТОЙ



АННА КАРЕНИНА II

アンナ・カレーニナ

Ⅱ

トルストイ  
原久一郎 譯

新版世界文學全集

15

新潮社 版

# 新版世界文学全集 15

アンナ・カレーニナ II

昭和三十三年七月二十六日 印刷  
昭和三十三年七月三十日 発行

定価 参百五拾円

地方  
売価 参百六拾円

訳者 原久一郎

発行者 佐藤義夫  
東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社新潮社  
東京都新宿区矢来町七一

電話東京 七一一一〜九番  
振替東京 八〇八番

乱丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 東光印刷株式会社  
製本 神田 加藤製本所

© Printed in Japan

# 目次

|              |    |
|--------------|----|
| 第四篇(続き)..... | 五  |
| 第五篇.....     | 元  |
| 第六篇.....     | 二五 |
| 第七篇.....     | 二七 |
| 第八篇.....     | 四五 |



アンナ・カレーニナ  
Ⅱ



## 第四篇（続き）

### 十八

カレーニンとの話がすんだ後で、ウロンスキイは入口の階段へ出た。彼は、自分がいま何処にいるのか、これから徒歩もしくは馬車で、何処へ行ったらいいのかを、しきりに思い出そうと努めながら、そこにしばらく立ち停っていた。思うさま辱すかしめられ、虐げられながら、その屈辱をそそぐ力をさえ奪われた、罪深い人間のような氣持がした。今まであんなにも誇りに軽快に闊歩していた軌道から、叩き出されたような氣持がした。今まであんなに確乎たるものと思われていた自分の生活のありとあらゆる慣習や原則が、俄かに虚妄な少しも適用のできないものになってしまった。今までは自分の幸福に対する一時的な、多少滑稽味を帯びた邪魔物に過ぎない、哀れな人間だと考えられていた欺かれた良人が、突然彼女自身によって呼び戻されて、こちらの屈従を思い知らせるような高みにまで引き上げられた。そしてその高みに引き上げられた良人その人は、もう今までのような腹黒い、偽善的な、滑稽な人間ではなく、まことに善良な、素朴な、偉い人物であった。ウロンスキイはそれを感じずにはいられなかった。役割りは急に変った。ウロンスキイは彼の崇高と自分の卑賤、

彼の公正と自分の不正を、わが身にひしひしと痛感した。あの男は悲哀のどんぞこにあつても寛容ということを忘れなかった。だのにこの俺は、こうした虚偽な心境の中に、低劣で弱小な形骸を曝している——こう彼は痛感した。が、今まで不当な侮蔑を加えていたその人物よりも、自分の方が遙かに低劣であつたというこの認識は、彼の悲哀の一小部分を形作つたに過ぎなかった。彼がいま自分を言ひようのない不幸な人間だと痛感したのは、そのときまで冷却していた彼女に対する情熱が、永遠に彼女を失つたと知つたこのときになつて、今までよりも遙かに烈しく、燃え立つて来たように思われたからである。彼女の病氣中に、彼は彼女を底の底まで知るようになった。彼女の魂を知りつくした。と、彼には自分がそのときまで、ちつとも彼女を愛していなかったように思われて来た。しかも、ようやく彼女というものがわかつて来て、正しい意味で彼女を愛するようになると同時に、自分は彼女の面前で烈しい屈辱をうけ、彼女の心に恥ずかしい記憶ばかり留めて、永遠に彼女を失つてしまったのである。その中でも何より恐ろしく思われたのは、カレーニンが恥じ入っている自分の顔から手を掩り取つたときの、あの滑稽じみた恥ずかしい自分の立場であつた。ウロンスキイは茫然自失した人のように、カレーニン家の入口の階段につつ立っていた。そして彼は、何一つなすべきことを知らなかった。

「辻馬車を呼んで参りましょうか！」と門番が訊ねた。  
「ああ、辻馬車を。」

三日三晩まんじりとしなかった後で、久々に家へ帰つて来ると、ウロンスキイは服も脱がずに、ごろりと長椅子の上へ横になって、両手を組んで、その上に頭を載せた。頭が重かった。想像や回想や極めて変態な考えが、非常な早さで、非常に鮮明に、後から後から浮かび上つて来た。自分が病人に注いでやるときに、匙からこぼした薬、産婆の白い手、寝台の前の床の上に跪いていたカレーニンの奇妙な姿勢などに関するそれであつた。

「眠ることだ！ 眠って忘れっちまうことだ！」彼は、すっかり疲れているから眠ろうと思へばすぐにも眠れるに違いないという健康な人の落着き払った自信を懐きながら、われとわが心に言つた。そして突際、瞬く間に、頭脳がもやもやして来て、忘却の淵に陥り始めた。『無意識境』の海の波浪が頭の上でジャンジャンとぶつかり始めた。突然、猛烈な電気の放電のようなものが、ドカンと彼の心を打つた。彼は発条仕掛の長椅子の上で、全身が跳り出すほど烈しく身顛いをし、両手をつつ張って、びっくりしながら跳ね起きた。そして膝立ちになった。両眼は、ちっとも眠らなかつたように、カッと大きく見開かれた。今の今までもやもや感じていた手足のけだるさや頭の重さは、一時にさつと消え失せてしまつた。

「あなたはわしを泥の中へ踏み倒してもよろしい。」というカレーニンの言葉が聞えた。そして彼は自分の前にカレーニンの姿と、カレーニンには目をくれずに、優しさと愛との籠つた眼で自分の方を眺めている、火のように熱く頬の

ほてつた、眼の輝いている、アンナの顔とを見た。彼はまたカレーニンが自分の顔から手を引き放させたときの、あの愚かしい滑稽な自分の姿を見た。彼は再び足を伸ばして、どかりと長椅子の上へ元の姿勢に身を投げて、眼を閉じた。

「眠ることだ！ 眠ることだ！」こう彼は心で言つた。が、両眼を閉じていながらも、あの思い出深い競馬の日の晩のように、アンナの顔がよりはっきりと見えて来た。

「あんなことはない、またこれからもないだろう。あの女はそれを記憶の中から消し去てしまいたいと思つてゐるのだ。しかし、俺はこれなしに生きて行くことができない。どうしたら今までどおりになれるだろう？ どうしたら今までどおり和解することができらるだろう？」

こう彼は声に出して、無意識に二度くり返した。こうした言葉のくり返しは、彼が自分の脳裡にむらがつてゐると思つた新しい心象と回想との、湧き出ようとするのをおさえつけた。がそれは彼の連想を長くおさえつけてはおかなかつた。やがてまた後から後から、非常な早さで、幸福だつたときのことが——それと一緒に、今し方の屈辱的な光景までが——走馬燈のように現われてきた。「あの、手を放して下さいな。」とアンナの声が言つた。彼は手を放した。途端に彼は、自分の顔が恥辱にまみれた愚かしい表情を浮かべてゐるのを、はっきりと感知した。

すこしも望みのないことが分つてゐたものの、何とかして眠ろうと努めながら、彼はじつと寢床の中に横たわつてゐた。そして彼はいろんな思想のつながりから偶然に湧い

て出る言葉を、絶えず低声で繰り返しながら、それによって新しい心象のうかび出るのを抑えつけようと努めていた。彼は聴き耳をそばだてた。——と異様な狂人のそののような囁き声で、こう繰り返している言葉が聞えた。「真価を認めることができなかった。十分にうけ入れることができなかった。真価を認めることができなかった。十分にうけ入れることができなかった。」

（どうしたんだ？ ひょっとしたら、俺は氣違いになるんじゃないかな？）彼は心で言った。（そうかも知れない、一体どうして人は氣違いになどなるんだろう？ どうして自殺などするんだろう？）こう彼はさらに言つて、眼を見開いた。と彼は自分の頭の傍に、嫂のワリーヤが拵えてくれた刺繍のついた枕を見出し、驚異の感に胸を打たれた。彼は枕の房にさわりながら、ワリーヤのこと、最後に会ったときのことを、思い出そうと試みた。が、局外の事柄を考えるのが、彼にはひどく苦痛であった。（いやいや、眠らなけりゃいけない！）彼は枕を引き寄せて、それに頭をのつけた。しかし、眼を閉じておくためには、かなりの努力が必要であった。彼は再び跳ね起きて、寝台の上へ坐りなおった。（この俺にとっては、これはもうすんでしまったことなのだ。）こう彼は心で言った。（俺はこれからなすべきことを熟考しなければいけない。何が残っているだろう？）すると彼の考えは速やかに、アンナに対する愛以外の生活の方へ馳せ移った。

（功名心？ セルフホフスコイ？ 社交界？ 宮廷？）

何処にも彼はとまることができなかった。これ等はみんな前には意義を持っていたのだが、今では、もう何等の意義ももたないのであった。彼は長椅子の上に立ち上つて、上着を脱ぎ、バンドをはずした。そして、楽に呼吸ができるように、毛深い胸をはだけて、それから室内を歩き廻った。（こんなときに人は氣違いになるのだな。）と、彼はくり返した。（こんなときに人は自殺をするのだな……は？ かしい目に遭わないように。）こう彼はゆっくりと言ひ足した。彼は戸口へ行つてそれを閉めた。それからじつと眼を見据え、かたく歯を食いしばりながら、机の傍へ行つて、ピストルを取り出し、一応改めてから、弾丸をこめて、またじつと考え込んだ。二時間ばかり、思想の張りつめているような表情を浮かべながら、頭を垂れ、ピストルを手にしたまま、じつとそこにつつ立つて彼は考えていた。（勿論だ）こう彼は、道理に叶つた、筋道のある、はっきりした思想の糸が、自分を疑う余地のない結論に導いたかのような調子で、われとわが心に呟いた。が彼には確かに思われたこの『勿論』が、その実、今までの間に十回も通つて来た回想や想像の、同じ範圍をいま一度歩みなおした結果に過ぎなかった。永遠に失われた幸福の思い出、現在の生活のまったく無意味であるという考え、自分の受けた屈辱の意識——そういうものの結果にはかならなかった。それはまたそうした想像や感情の当然の帰結でもあった。

（勿論だ）こう彼は、自分の考えが三度回想や思想の妖術

に惑わされた圈内へ戻って来たときにくり返した。そして胸の左側にピストルを押し当て、拳の中で握り潰してしまふような意気込みで、腕いっぱい力でぐっと握りしめながら引金を引いた。発射の音は聞えなかった。が胸部に当たった烈しい打撃が、彼をよろめかせた。彼は机の端につかまろうと思った。然し思わずピストルを落して、よろよろとなつて、そのままドシンと尻餅をつき、びっくりしたようにきよろきよろ周囲を見廻した。彼はガニ股に彎曲した机の脚や、紙屑籠や、虎の皮の敷物などを、下の方から眺めながら、これが自分の部屋だということには気がつかなかった。客間を歩いている従僕のギンギン軋る小きさみな足音が、彼をはっと正氣にかえらせた。一生懸命に考えをまとめた。そして彼は、自分が床の上にいることをさとった。虎の皮の敷物と自分の手に、べつとりとついている血糊を見出して、自分がピストル自殺をくだてたことを彼はさとった。

「何て馬鹿馬鹿しい！ 急所へあたらなかったんだ！」

と、盲滅法に片手でピストルを探しながら、彼は言った。ピストルはすぐ傍にあったのだが、彼は遠くの方ばかり探した。ピストルを探し続けながら、今度は反対の側へ身体を伸ばした。と彼は、身体の釣合いを保つことができず、だく、だくと血を流しながら、そのまま倒れてしまった。

気が弱くて困るということを口癖のようにいつも知人にこぼしていた頼髯のあるハイカラな従僕は、床の上によつて倒れている主人を発見すると、飛び上るほどびっくりして、

出血している主人を置きざりにして、助けを求めに飛び出した。一時間経つと嫂のワリーヤが駆けつけて、四方八方へ医者呼びにやり、どやどやと一時にやつて来た三人の医者の手を借りて、負傷者を寢床へ寝かせつけた。そして彼女は、義弟の看護をするために居残つた。

## 十九

カレーニンによつてなされた錯誤、——彼が妻と会うに當つて、彼女の悔悟が真剣であり、自分が彼女を赦してしまい、そして彼女が死なずにすむような場合が、あるかも知れないということを考えておかなかった錯誤——は、モスクワから歸つて二個月経つと、疑う余地のない、はっきりしたものになった。が、彼の仕出かしたその失敗は、彼がそういう場合を考えなかったためにのみ起つたのではなくて、同時にまた、彼が瀕死の妻と顔をあわせるその日まで、自分の心を知らなかったために起つたのである。彼は病気の妻の枕許で、生れて始めて、他人の悩みが自分の心にかもし出した、相手の悩みを汲んでやるといふ感傷的な氣持、——今までの彼が有害無益な弱点として恥じていたその氣持に、打ち負かされてしまったのである。と、彼女に対する憐憫、彼女の死を願つていたことを悔いる氣持、特に、他人を赦してやるといふ歡喜の情が、突然彼に、自分の苦惱の終熄したという事実のみならず、これまでついぞ味わつたことのない心の平安をさえ感じさせた。そして突然、

今まで自分の苦悩の源泉だったものが内的歓喜の源泉になったことや、彼女を非難したり叱責したり憎んだりしていた時分には解決することのできないように思われていたものが、彼女を赦し彼女を愛するようになると同時に、極めて単純な明白なものになったことを、しみじみと感じる次第であった。

カレーニンは妻を赦し、彼女の苦悶と悔悟に対して、心から妻を憐れんだ。ウロンスキイをも赦した。絶望のあまりに行なったという自殺行為の噂を耳にしたらは、とりわけ彼を気の毒に思った。カレーニンはまた子供に対しても、以前より不憫と考えるようになった。そして、あまりにこれまで面倒を見なかったという点で、自分を責めるようになった。が、新しく生れた小さい女の子に対しては、単なる憐憫にとどまらず、甘い優しささえ混り合った、一種特別な気持を経験した。最初彼は新たに生れた脆弱なその女児——母の病中まったく投げやりにされてあった自分の子でないその女児、彼が面倒を見なかったらきつと死んでしまったに違いないその女児に対して、単なる同情の気持から世話をやいた。そして自分がどんなにその子を好きになったか気づかなかった。彼は日に数回ずつ子供部屋へはいって行って、長いことそこに坐っていた。そのために、最初は怯気を懷いていた保姆や乳母までがすっかり彼に馴れてしまった。彼はときどき黙々として半時間も、眠っている赤ん坊のサフランのように真赤な、むく毛の多い、皺だらけの顔を眺めたり、響め顔の動く様や、手の甲でしきり

に眼や鼻梁を擦っている、指をすっかり畳み込んだ、むっちり膨れた手の様子に、見惚れたりしていることがあった。こういうときには、特にカレーニンは、全く平安な自満自足の人間になったような気持がして、自分の境遇に何等異常なもの、変更する必要があるものを認めなかった。

が、だんだんときが経つに従って、この境遇がどんなに自分にとって自然であっても、そこにどまつているわけにゆかないということが、次第にはつきりとわかって来た。自分の魂を導いていた幸福な霊的な力の外に、自分の生活を導いているも一つ別な、荒々しい、前のと同程度、若しくはそれ以上に力強い力のあること、そしてその力が、彼の望んでいる謙虚な安けさを与えないということが、彼にはだんだんみなわかって来た。みんなの者がどうしたのだといったような驚きの色を浮かべて、自分の様子を眺めていること、自分の気持が理解できずにことあれかしと待ち構えていることが、彼にはだんだんわかって来た。特に彼はアンナとの関係に於いて堅牢でない不自然なもののあるのを感じた。

死の切迫によってかもし出された柔軟な気持が消えてしまふと、カレーニンは、アンナが自分を恐れ、煙たがり、まともに此方の眼を見ることができずにいることに、気がつくようになって来た。彼女は何か話したいがどうしても話す気持になれないというような態度をしていた。彼女は自分達二人の關係がそのままで行くことのできないのを予感して、彼から何ものかを期待しているようであった。

二月の末には、今度生れたアンナの子供、同じくアンナと命名されたその女兒が、病氣に罹るという出来事が起った。

カレーニンはその朝子供部屋へ出かけて行って、医者呼びにやる手配をして、それから役所へと馬車を駆った。役所の仕事をすませると、彼は三時すぎに家へ帰って来た。

玄關へはいるとき、彼は編紐と熊の皮の肩衣をつけた好男子の従僕が、アメリカ犬の毛皮から製した真白いロトローンダ（婦人用の長）を持って、つつ立っているのに眼を留めた。

「どなたが来ておられるのだ？」とカレーニンは訊ねた。

「エリザヴェータ・フョードロヴナ・トヴェールスカヤ公爵夫人がお見えになつていらつしやいます。」こう微笑を浮かべながら（とカレーニンには思われた。）従僕は答えた。

カレーニンは、辛い苦しいこれまでの期間に、社交界での自分の知人、そのうちでも婦人連が、自分と妻との關係に特殊の興味を懷いていることを認めていた。彼はそうした知人達の眼の中に、辛うじて押し隠している喜悅の情、いつぞや例の弁護士の眼の中に認め、今またこの従僕の眼に認めたような、何ものかに対する喜悅の情を、認めないわけにはいかなかった。誰も彼も、歡喜に酔っているようだった。まるでこう、誰かを嫁にでもやる時のようであった。人々は彼と会うと、隠しきれない喜びの色を浮かべて、その健康を訊ねるのだった。

トヴェールスカヤ公爵夫人が来ているという事実は、彼女と結びついている回想からいっても、あまり自分が彼女を好かないという点からいっても、カレーニンには不快で

あった。で彼はそのまま子供部屋へはいって行つた。第一の子供部屋では、セリョージャが、びつたりと机に胸を押しつけて、両足を椅子の上に乗せ、愉快そうに喋りながら、一生懸命に何やら絵を描いていた。アンナの病中に、フランス婦人のそれと代つたイギリス婦人の家庭教師は、編みかけのショールを手にして子供の傍にかけいていたが、あわてて立ち上ると、丁寧にお辭儀をして、ぐいぐいとセリョージャを引張つた。

カレーニンは片手で子供の髪を撫でながら、妻の健康に対する教師の質問に答えたり、医者が『ペビ』さんの容体を何と言つたか、それを訊ねてみた。

「お医者のお話では、別に危険なことはございませんとのこと。それであのう、お湯を使わせろとのことでございます。はア。」

「しかし、まだあの通り苦しがつてゐるじゃありませんか。」と、隣室の嬰兒の泣き声に耳を澄ませながら、カレーニンは言つた。

「どうもあの乳母が駄目なんだらうと、思いますんでございますけれどね、旦那様。」と思ひきつたような調子でイギリス婦人は言つた。

「どうしてそうお考えになるんです、あなたは？」と歩みを停めて彼は訊ねた。

「ボール伯爵夫人のお宅でも、これと同じようなことがございますよ、旦那様。しきりにお子さんに医療をなすつていらつしやいましたけど、だんだんに檢べて見ましたら、

そのお子さんはただお腹が空いているだけだったということが、ようやく分ったんでございます。乳母にお乳がなかったんでございますの。はア。」

カレーニンは思案に暮れた。しばらくそこに立ちつくしてから、彼は隣室へはいって行った。嬰兒は乳母の手に抱かれたまま、首をのけぞらせて、しきりに身体を藻掻いていた。そして彼女は口の先きへ突きつけられたふつくりと膨れた乳母の乳房を含もうともしなければ、乳母と、自分の上へ身体を折り曲げるようにした保母とが、二人がかりで『ねんねよう』と言っているにも拘らず、黙ろうともせずに泣き叫んだ。

「まだちつともよくならないかい？」とカレーニンは訊ねた。

「大変おむずかりになるんでございますのよ。」と囁くような声で保母が答えた。

「ミス・エドワードの話では、乳母にお乳がないのかも知れないというのだがね。」と彼は言った。

「わたくしもそう思っているんでございますのよ、旦那様。」

「ではなぜそのことを言ってくれないのか？」

「どなたに申し上げられましょう？ 奥様はあの通りまだお身体がお悪いんでございますもの。」と保母は不服らしい調子で答えた。

この保母は古くから邸に使っている召使だった。で、カレーニンはこういう単純な彼女の言葉の中に、自分の立

場に対する諷刺のあるのを認めた。

嬰兒は身悶えしながら、同時に囁れた声を張り上げながら、前よりも一層烈しく泣き叫んだ。保母は手を振って、赤ちゃんの傍へ行き、乳母の手から抱き取って、しきりにそこらをほろって歩いた。

「医者を呼んで乳母を診て貰わにゃならんね。」とカレーニンは言った。

見たところ頗る丈夫そうなおめかしやの乳母は、お払い箱になりそうなのでびっくりしながら、鼻声で何やらムニャムニャ言った。そして彼女は、大きな胸を隠しながら、自分の乳の出工合を疑ったことに對して、せせら笑うような笑いを浮かべた。この笑いの中にも、カレーニンは、自分の立場に対する嘲りの色を発見した。

「ほんとにお氣の毒なお見様ですこと！」嬰兒をあやしなからこう言って、保母はなおも歩き続けた。

カレーニンは椅子に腰をおろし、切なそうな悲しそうな顔つきで、部屋の中を往ったり来たりしている保母の姿を眺めていた。

ようやく泣きやんだ嬰兒をさんわりと凹んだ小さな寢床へ寝かしつけ、枕をなおして、保母がその傍を離れると、カレーニンは立ち上り、我慢して爪先き立ちで歩きながら、嬰兒の傍へ進んで行った。しばらくの間彼は黙って、同じ悲しそうな顔つきを続けながら、じっとその姿を眺めていた。突然、にこやかな微笑が、髪や額の皮を動かしながら、ぱつと彼の顔に浮かび上った。彼は同じ静かな歩調で、そ

つと部屋を出て行つた。

食堂へはいると呼鈴を鳴らして、はいって来た従僕にもう一度医者呼びにやれと命じた。あんなに可愛らしい赤ん坊の面倒を少しも見やらないことに對して、彼は妻が忌々しかった。で、そういう忌々しい氣持の結果、彼女の傍へ行きたくなかつた。ベットシイ夫人をも見たくなかつた。が、なぜいつものように自分の傍へ来ないのだからと、妻が不思議に思うかも知れないので、彼は自分に努力を加えて、寢室の方へと近づいて行つた。柔らかな敷物の上を戸口の方へ進んだときに、聞きたくない話が、心ならずも耳にはいった。

「あの人がはなれて行つてしまふのでさえなければ、あなたのお断わりになるのも、あの人のいうことも、わたしには合点が行くのですけどね。でも、此方の御主人はそんなことには超然としていらつしやる筈だと思ひますがねえ。」とベットシイが言つた。

「あたしは良人のためにでなく、あたし自身のためにそんなこと望みませんの。もうもう、そんなことおつしやらずにおいて下さいましな——」アンナの興奮した声が答えた。

「ええ、でもね、あなたはあの人と別れの挨拶をしたいと思はずにはいられないだろうと思ひますの。何といつてもあなたのために、自殺までしかけた人ですからねえ……」

「それですから、なおさらあたし厭なものですのよ。」

カレーニンはびつくりしたような、悪いことをしたといつたような表情を浮かべて立ちどまつた。そのままそつと

引き返して行こうかと思つた。が、それでは估券にかかわると思ひなおして、再び踵を返し、エヘンと一つ咳払いをして、寢室の方へ歩いて行つた。話し声はびたりと歇んだ。彼は中へはいつた。

アンナは灰色の寝巻を着て、まんまるい頭の真黒な髪の毛を、濃い刷毛のように短くそっくりと刈り揃えた姿で、ベッドに坐つていた。良人の姿を見た場合いつもそうなうに、彼女の顔にあつたいきいきした色が、一時にさつと消え失せてしまつた。——彼女はうなだれて、不安そうにベットシイの顔を覗いた。ベットシイは、思ひきり新式の装いを凝らし、ランプの笠のように頭上に聳え立つ帽子を冠り、斜めなはつきりした縞が胴とスカートに反對の方向についている鳩色の服を着て、ひよろ長い平べったい身体をしゃんと保ちながら、アンナと並んでかけていた。彼女は首を傾げて、嘲るような笑みを浮かべながら、カレーニンを迎えた。

「あら！——こう彼女はさも驚いたという態度で言つた。『まあ嬉しゅうござんすこと、あなたがおうちにいらしつて。あなたは何処へもお顔をお出しになりませんのねえ。わたしアンナさんが御病氣におなりになってから、初めてお目にかかりましたわ。わたしもうみんな伺いましたよ——奥さんに対するあなたのご孝行ぶりは。ほんとにあなたは、ずいぶん御親切な旦那様でいらつしやいますのね！——と妻への彼の行為に對して寛容の勲章でも授与するもののように、意味ありげな愛嬌たつぷりの態度を示しながら、彼女

は言った。

カレニンは冷やかに会釈した。それから彼は妻の手に接吻して、身体の工合を訊ねた。

「だいぶいいようでございますの。」と相手の視線を避けながら、彼女は答えた。

「でも、お前はまるで熱病にでも罹ったような顔色をしてるじゃないか。」こう『熱病』という言葉に力を入れて、彼は言った。

「あんまりお話がはずみすぎたからですわよ。」とベツトシイが引き取って言った。「ほんとに、わたし自分勝手にずいぶん長居をしたようですわね、じゃ、これで失礼しますわ。」

彼女は立ち上った。とアンナは急に赧い顔をして、あわてて彼女の手をおさえた。

「いいえ、もう少しいらして下さいましな、どうぞ。わたくしあなたにお話ししなければならぬがございますの……いいえ、あなたじゃない、あなたにですわ。」と彼女はカレニンの方をむいて言った。真紅の紅葉が彼女の頸や額を蔽うた。「わたくしあなたに隠しごとをしたかありませんし、またすることができませんの。」こう彼女は言った。

カレニンは指をポキポキ鳴らしながらうなだれた。

「ベツトシイさんのお話では、ウロونسキイ伯がタシケントへ行かれるについて、わたくしどもへ挨拶に来たいとおっしゃるんだそうでございますけどね。」彼女は、良人の

顔を見ることができなかった。明らかに彼女は、どんなにそれが辛くとも、言うだけのことは残らず言ってしまうおうと、急ぎこんでいるものようであった。「わたくしはともお目にかかれな」と申しましたの。」

「あら、アンナさん、あなたはご主人のお心次第だつておっしゃったじゃありませんか。」とベツトシイが彼女の言葉を訂正した。

「ええ、……いいえ、そうじゃございません、わたくしあの方にお目にかかるわけにはまいりません。それに、お目にかかったって、なんにもなり……」彼女は不意に言葉を切つて、探るように良人の顔を覗いた。(カレニンは彼女の方を見ていなかった)——「とにかくわたくし、お目にかけたくは……」

カレニンは進み出て、妻の手を取ろうとした。

彼女はちよつと、自分の手を求めている湿っぽい大きな脈管のむくむくと脹れ上った良人の手の傍から、自分の手を引込めた。が、心に鞭撻を加えて、良人の手を握りしめた。

「あなたがそんなにもわしを信頼してくれるのは実に有難いが、しかし……」と、自分一人の場合なら容易に明白に解決することのできる問題でありながら、自分の眼から見る世間的な自分の生活を拘束し、愛と赦しの感情に身を委ねることを妨げる野蛮な力の権化のように思われるベツトシイ・トヴェールスカヤ公爵夫人の面前では、それについて何とも言ふことができないのを、ひどく忌々しく思い

ながら、どぎまぎして、彼は言った。彼はトヴェールスカヤ公爵夫人ベットシイの顔を眺めながら、はたと返事に行き詰った。

「ではあたし失礼しますよ、アンナさん。」と立ち上りながら夫人は言った。彼女はアンナに接吻して、そのままさっさと出て行った。カレーニンは彼女を送りながらついて行った。

「カレーニンさん、わたしはあなたが心から寛大なお方だということをよく知っています。」ベットシイは小さな客間で歩みを停めてもう一度ことさらつよく彼の手を握りしめながら、こう言った。「わたしは局外の人間です。ですから、わたしはアンナさんを大好きですし、あなたのことも心から尊敬しておりますので、思いきって御相談にあずからしていただきますのよ。ようございませうか、あの人を寄せておやりなさいましよ。アレクセイ・ウロンスキイは名誉心の権化のような男でしてね、タシケントへ行ってしまうおうとしているのですから。」

「いや、奥さん、相談にあずかって下すって有難う。ですが、家内が誰かに会う会わぬということは、家内の方で決めるべき問題だと考えますので。」

こう彼は例によって威厳のある態度で、眉を吊り上げながら言った。がすぐに、どんな言葉を口にしようが、今の境遇では、威厳などのありよう筈がないという事に思い到った。そしてその事実を、ベットシイが自分の言葉をきいた後で、自分の顔を見つめたときの、控え目ながら底意

地の悪い、嘲るような微笑によって感じとった。

## 二十

カレーニンは、広間でベットシイに別れを告げて、妻の部屋へ帰って来た。アンナは横になっていた。が、良人の足音を聴きつけると、あわててもとのように坐りなおして、びくくりしたように彼を眺めた。彼はアンナが泣いているのを認めた。

「お前がこのわしを信頼してくれて、わしはほんとに有難いと思うよ。」こう彼はベットシイの前でフランス語で言った文句を、もう一度優しくロシア語で言い直しながら、彼女の傍に腰をおろした。彼が彼女にロシア語で『お前』と言うと、その『お前』が堪え難いほどアンナの心を苛立たせた。「いや実際お前の信頼を有難いと思う。わしもやはり、ウロンスキイ伯は遠くへ行ってしまうんだから、ここへやって来る必要など少しもない筈だと思っているんだがね。しかし……」

「ええ、そのことはもうちゃんと申しあげたでしょう、なぜまた、そんなことをくりかえしておっしゃいますの？」と、突然彼女は抑えつける余裕もなく、苛立たしい気持ちをばらまきながら、良人の言葉を遮った。「何の必要もないなんて、」と彼女は思った。「自分の愛している女、そのためにはわが身を破滅させても構わないと思っている女、そして実際そのために身を破滅させた女、自分なしにはどうし